

# 授業における専門学校生のストレス把握に対する研究 —唾液アミラーゼ測定によるストレス評価—

東京福祉専門学校

田邊慎悟

## 【1. 緒言】

2019年国民生活基礎調査の概況における、12歳以上の者における日常生活での悩みやストレスの有無をみると「ある」が47.9%、「ない」が50.6%となっている。あわせて、20代男性は約40%、女性は約50%となっている。いずれの年代においても、男性より女性のストレス平均値が高い値となっている。

あわせて、2010年国民生活基礎調査の概況におけるストレスの原因を、性、年齢階級別にみると、「自分の学業・受験・進学」は男女とも「12～19歳」が最も高い数値となっている。そして、自分の仕事は30～39歳が最も高くなっているが、20歳以降から右肩上がりとなっている。ストレス原因において、家族や人間関係については、全世代において10%～20%の間を推移している。

令和4年雇用動向調査結果の概要における、産業別入職者・離職者をみていくと、「医療、福祉」は「宿泊業、飲食サービス業」・「卸売業、小売業」に次いで入職者数が多い順となっている。但し、離職者数においても、「卸売業、小売業」に次いで増加している。

水野らによると、ソーシャルワーカーの仕事には、その支援対象や職務内容から生じるストレスが多く、このようなストレスが積み重なり、結果として、バーンアウトが生じることが指摘されている。

令和4年度専修学校各種学校調査統計資料によると、令和3年度中の中途退学者の割合については全体平均が6.3%で、2年度中の6.7%をわずかに下回っている。しかし、分野別では衛生、教育、社会福祉で増加を見せており、5.8%であったものが、7.7%と増加している。

先に記述されていることを踏まえ、本研究においては、ソーシャルワークを志す学生を対象としたストレス要因を質的研究に基づいて実施し、効果的な学びを構築する一因となることを目的とする。

## 【2. 研究方法】

### 1. 対象者

東京福祉専門学校社会福祉科4年生 2名

学生A：22歳女性（日常行動検査：AC）GPA累積3.80、学生B：22歳女性（日常行動検査：CS）、GPA累積3.55

## 2. 研究方法

東京福祉専門学校社会福祉科 4 年生 2 名の学生に対し、日常行動検査の他、①講義受講前後、②外部機関における実習前後、③演習教育における前後、④国家試験における模擬試験前後、⑤自宅静養時において、NIPRO 乾式臨床化学分析装置唾液アミラーゼモニターを使用し、唾液アミラーゼを測定。

あわせて、上記学生に対して半構造化面接を実施し、これをインタビュー・ノートとして逐語記録を実施。このインタビュー・ノートに対して MAXQDA24 を活用し、コード化の作業を行い、カテゴリに要約していった。

### 【日常行動検査】

日常行動検査は 26 項目に対する質問に回答し、X 軸を積極性と慎重性、Y 軸を自由性と規範性の 2 軸から Promoter, Controller, Supporter, Analyzer の 4 類型に分類され、日常行動の傾向が分かるものである。

Promoter には、話したい、注目を浴びたい、遮られたくないといった特性がある。Controller においては、自分で決めたい、テキパキ進めたい、指示命令されたくないといった特性がある。Supporter は、理解されたい、貢献したい、否定されたくないといった特性がある。Analyzer は、理解したい、マイペースにいきたい、あれこれ話さないでほしいといった特性がある。

### 【唾液アミラーゼ測定】

唾液アミラーゼモニターは、使い捨て式のテストストリップ（商品名：チップ：図 1）と本体（130×87×40mm190 g, 商品名：メータ；図 2）で構成されている。だ液中のアミラーゼがチップの試験紙に含まれる  $\alpha$ -2-クロロ-4-ニトロフェニル-ガラクトピラノシルマルチサイドを加水分解し、2-クロロ-4-ニトロフェノールを生成する。生成した CNP による試験紙の反射光強度変化を本体で測定しアミラーゼ活性値に換算する。

唾液採取紙を口腔に挿入し、30 秒ほどかけて舌下部から直接全唾液を採取する。（図 3）テストストリップを本体にセットすると、自動的に本体の電源が入る。ディスプレイの指示に従いレバーを操作すると、スリーブのバネの裏側に貼り付けられているアミラーゼ試験紙が唾液採取紙へ押し付けられ、唾液が転写される。転写時間は 10 秒に設定されており、終了を示すディスプレイの指示に従いレバーを元に戻す。唾液アミラーゼモニターは、唾液採取、転写と測定の計 1 分ほどで唾液アミラーゼ活性を分析できる。

図 1：チップ

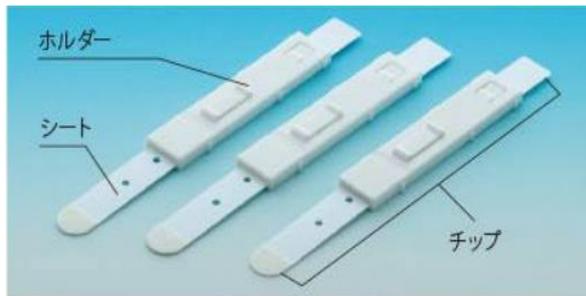


図 2：本体



図 3：唾液採取



#### 【半構造化面接】

学生 A, B に対して 20 分～40 分の半構造化面接を実施。あらかじめ決めておいた質問としては、①いま、学業上ストレスに感じていること、②学業上のストレスへの対処法について、③学業上自分自身の成長を感じていることや自分で自分を褒めてあげたいこと、④学んだことを通して、自己実現していきたいこと、⑤利用者や職員と接しているときなど、他者と業務を行う上でどのような感情を感じているか、⑥感情をどのようにコントロールしているか、⑦福祉分野を諦めようと思ったことはあるか、の計 7 項目を質問。

半構造化面接については、あらかじめインタビューーの了承を得た上で録音および面談状況を録画した。

### 【3. 研究結果】

#### 【日常行動検査】

学生 A における日常行動検査においては、X 軸 2.9, Y 軸 1.2 であったため、AC の行動傾向であることが分かった。同じく学生 B における日常行動検査においては、X 軸 2.3, Y 軸 2.4 ということから CS という結果であった。

#### 【唾液アミラーゼ測定】

①講義受講前後においては、学生 AB とともに同日、同時間に測定を実施。測定時期は、開講から 5 週目、6 週目で実施。受講科目は、同一科目において測定した。科目特性としては、精神領域を学ぶ科目であり、聞き手に学んでもらうため、話し手が中心である、いわゆる伝達型の授業である。計測は 2 日間実施。1 回目の測定、学生 A 開始前：34, 学生 B

開始前：3，学生 A 終了後：26，学生 B 終了後：2 であった。2 回目の測定、学生 A 開始前：5，学生 B 開始前：14，学生 A 終了後：18，学生 B 終了後：26 であった。

②法定実習教育として、学生 A,B ともに精神領域における医療機関実習教育に参加するため、実習前後における測定を実施。A,B の居住地が離れていることもあり、異なる場所での実習となっている。測定は出勤時および退勤時に測定をすることとした。あわせて測定頻度は実習初日から 5 日間連日の測定としている。

学生 A において、実習初日（出勤時：10，退勤時：12），実習 2 日目（出勤時：29，退勤時：33），実習 3 日目（出勤時：26，退勤時 34），実習 4 日目（出勤時：29，退勤時：24），実習 5 日目（出勤時：8，退勤時：27）であった。（表 1）学生 B において、（出勤時：51，退勤時：24），実習 2 日目（出勤時：4，退勤時：10），実習 3 日目（出勤時：4，退勤時 23），実習 4 日目（出勤時：19，退勤時：4），実習 5 日目（出勤時：16，退勤時：12）であった。（表 2）

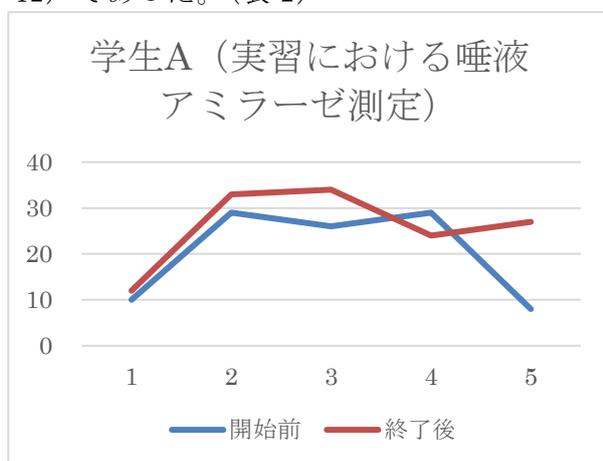


表 1：学生 A（実習における測定）

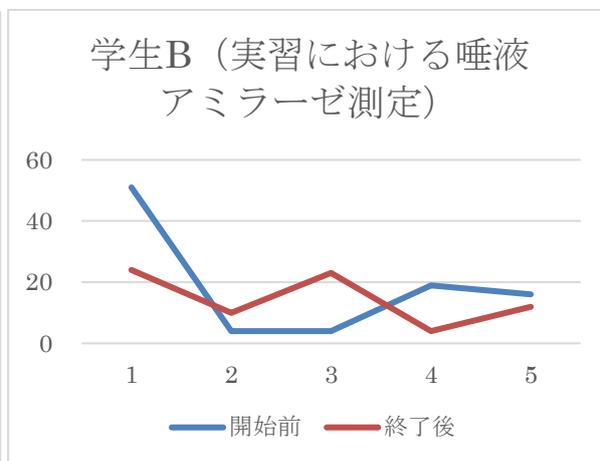


表 2：学生 B（実習における測定）

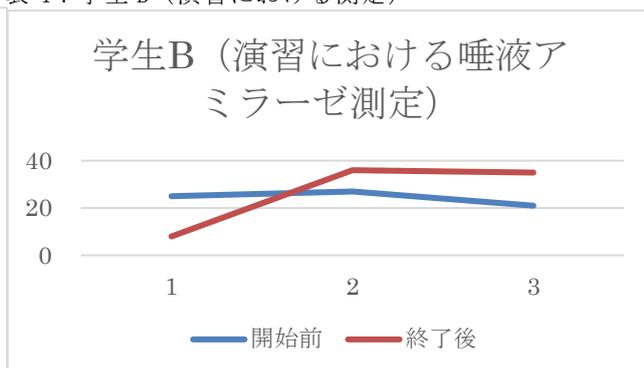
③演習教育においては、学生 AB 間で意見交換や討論などを中心とする、対話型授業を重点に実施。時折、課題に対して問答を挟む、いわゆる問答型授業を展開した。測定においては、学生 A,B ともに同日に実施し、3 回の計測を行った。意見交換や討論する内容については、学生 A,B が設定した卒業研究に対する内容である。

学生 A において、演習授業時測定 1 回目（開始前：4，終了時：8），演習授業時測定 2 回目（開始前：16，終了時 4），演習授業時測定 3 回目（開始前：13，終了時：：11）であった。（表 3）学生 B においては、演習授業時測定 1 回目（開始前：25，終了時：8），演習授業時測定 2 回目（開始前：27，終了時 36），演習授業時測定 3 回目（開始前：21，終了時：：35）であった。（表 4）

表 3：学生 A（演習における測定）



表 4：学生 B（演習における測定）



④社会福祉士および精神保健福祉士に対する模擬試験において、本校では3社からの模擬試験を実施している。学生A,Bに対して、模擬試験開始前および終了時に測定を実施。模擬試験の難易度に差はあれども、構成に変化はない。模擬試験の実施形態は以下のように変化する。

X社（10月）：国家試験の基準に照らし合わせて、同時間および同様のスケジュール（2日間）で実施

※成績による国家試験対策クラス分けに影響をする

Y社（11月）：国家試験の基準に照らし合わせて、同時間で実施するが一部の科目のみを実施

※成績による国家試験対策クラス分けに影響をする

Z社（12月）：国家試験の基準に照らし合わせて、同時間および同様のスケジュール（2日間）で実施

※成績による国家試験対策クラス分けに影響しない

学生Aにおいて、模擬試験（X社）時の測定（開始前：11，終了時32），模擬試験（Y社）（開始前：13，終了時4），模擬試験（Z社）（開始前：12，終了時4）であった。（表5）学生Bにおいては、模擬試験（X社）時の測定（開始前：8，終了時41），模擬試験（Y社）（開始前：23，終了時6），模擬試験（Z社）（開始前：11，終了時35）であった。（表6）

表 5：学生 A（模擬試験における測定）

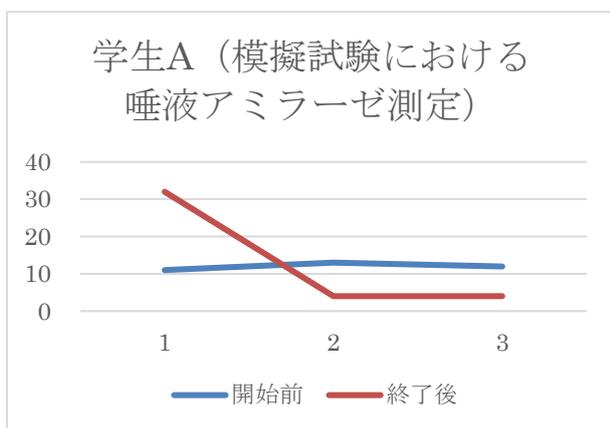
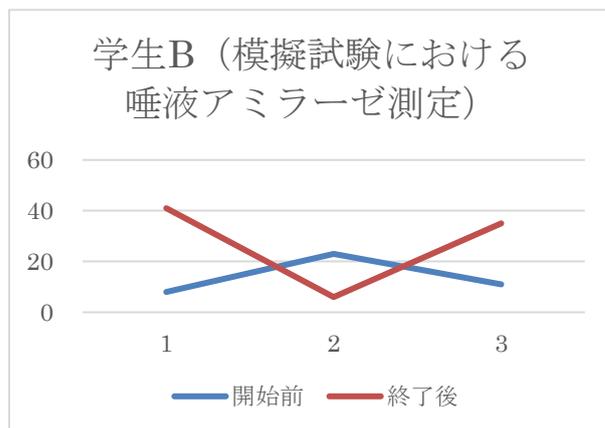


表 6：学生 B（模擬試験における測定）



## ⑤自宅静養時

本体及びチップを学生 A, B に渡し、自身が安心できる環境において測定することを依頼。測定時の環境を確認したところ、学生 A, B ともに就寝前に測定した。学生 A における就寝前は 8 であり、学生 B の就寝前は 4 であった。この値を基準値とした。

### 【半構造化面接】

学生 A に対して 42 分の半構造化面接を実施。逐語記録数は 4062 文字であった。あわせて、学生 B に対して 23 分の半構造化面接を実施。逐語記録数は 4,862 文字であった。あらかじめ、設定された質問に対する回答を要約したものは、以下の通りである。なお、インタビュー内容は斜体で記載する。

【質問項目①】いま、学業上ストレスに感じていることを教えてください

【学生 A】

国家試験です。

まあ、今の環境でいうと、ほとんど 11 月からは勉強ができていない状態があつて。自分ができてない、自分がそのほとんど勉強ができていないといった時に、他の人はこの時間を使って勉強してる。自分がゼミとかやってる時間に、ほかの人は国家試験の勉強をしてると思うと焦りが出てきてストレスになります。

【学生 B】

学業上ストレスに関しては、模擬試験です。

点数が落ちてしまうんじゃないかっていう不安。

結果に対して、不安があつて、それがストレスになっていると思います。

【質問項目②】学業上のストレスへの対処法はどうしていますか。

【学生 A】

国家試験の学業上のストレスの対処法って、どういうふうにされてますか？  
手法は正直確立はされていないと思います。勉強をしたら解決するかと言われれば、それは、安心材料になるかと言われたら、安心の度合いは現在よりも増えるとは思いますが。それがストレスの対処になつてるかと言われるたら、またそれは違うかなつてというのが今の率直な意見です。

【学生 B】

とにかく勉強する時間を持つことです。

勉強や模擬試験とかで点数が落ちるところがものすごく不安で、ストレスになるから、それを勉強することにしていきます。

ただ、落ちないかは、正直わかんないじゃないですか。なので、その対策をしておく。落ちないような、努力をしておくことで、落としてしまうんじゃないかっていう不安もな

くなりますし、あとは自分の中で、「もうやったんだから、これで落ちたらしょうがない」みたいな感じです。ある意味で諦めというか、勉強をすることがそのストレスを軽減する要因だと思います。

【質問項目③】 学業上自分自身の成長を感じていることや自分で自分を褒めてあげたいことはありますか

【 学生 A 】

思い浮かばないです。

年月というか、まあ入学して四年間過ごせば、おのずと知識はついてくるわけで、それは順当な段階を踏んでるだけであって、成長かって言われたら、なんかまた違うような認識で、ステップを踏んでくるってだけであって、成長したのか？と言われたら、それは当然、社会精神を目指すにあたっての、ある意味で通過儀礼なものであるのかなと思った時に成長かどうかって言われたら、私の中では、あんまり結びつかないような気もしなくもないんですけど、まあゼロベースで考えればプラスにはなってるので、成長とは言えると思います。そのために社会精神を目指す上でやらなければならないことっていうか、身につけていく必要があるものって言ったときに、そこが成長かって言われると、私はちょっと判断がつかないと言いますが、難しいなとは思っています。

【 学生 B 】

去年の、社会福祉士の法定実習の前期で中止になって、そこが辛かったんですけど、そこを辛いまま終わらせず、今のゼミや次の実習、その後のすべてにおいて、その経験があったからこそ、いろんな場所に应用することもできました。あとは何なんといってもゼミにつなげることができたっていうのはよかったと思いますし、諦めなかった自分を褒めたいです。

【質問項目④】 学んだことを通して、自己実現していきたいことを教えてください

【 学生 A 】

一番は、自分が入学した時から思ってる、相談して良かったって思われるワーカーになるっていう像を実現することが私の自己実現だと思っています。

働く上ではずっとそれは、ある意味で指標にもなるんじゃないかな。

その解決すぐ解決する五年後、十年後すぐそれが達成できるってよりかは自分の中で指標になって、いつでもそれを追い求め続けるという感じにはなるのではないかなと考えています。

【 学生 B 】

自己実現。将来像みたいな感じですか？

質問とあっていなかったら、ちょっとぶった切ってください。この四年間であの自分の強

みっていうのを見つけられた気がして、そこが諦めないとこだったり、なんか一生懸命やることだったり、あとは行動力があるところだと思うので、それはやっぱりあの将来も活かしつつ、笑顔で働きたいなっていうか。ある程度地位を持ちたいなっていうのはありますね。

【質問項目⑤】利用者や職員と接しているときなど、他者と業務を行う上でどのような感情を感じていますか

【 学生 A 】

実習生本位の言い方なので適切ではないと思うんですけど、実習生って学びに来てっていうのと指導者からのその事前のオリエンテーションで、この対象の患者さんを見つけて、まあ支援方針を考えると一応、実習のプログラム上もあったので、まずは積極的に話を聞きに行かなければならないとはまた違うんですけど、患者さんとどんどん関わっていくっていう存在ではあって、まあ結局聞かなきゃいけないっていうふうな意識だった。実習生本位の言い方ではあるなっていうのは、認識は一応してはいるつもりではあるんですけど。

患者さんと接する上で、職員でもない立場、職員でも同じ、その病院に入院してたりとか、その施設を利用する利用者でもない実習生という、ある意味で特殊な立場で入ってるからこそ、皆さんがある意味で愚痴を吐いてくださることが、ある意味でマイナス感情だったり、こうネガティブなものをこう実習生に吐き出す場面がまあ割と多いかな？そういう場面にいることが多いかなと思った時に、そこにまあある意味で流されてしまうような、ああ辛いなっていう風な感情になることが多かった印象がします。

職員に対しては、指導者のあり方っていういろいろその施設施設であると思うんですけど、一人の指導者にずっとつくパターンと指導者が変わる変わる実習中見ていくってパターンの大体二パターンが想定されると思うんですけど、一個目の指導者に、つくパターンだと、日々、ちゃんと自分が毎日学んだことが吸収されてるかな、ちゃんと、昨日よりも良かったねって思ってもらえることが、思ってもらえてるのかなとか、それこそ今日は、失望されないとか、あると思います。

【 学生 B 】

みんなすごいなというかなんで、そんなに悩まないんだろうっていうのはあるかもしれないです。具体的にいうと羨ましいですね。

うん、羨ましいが近いかもしれない。自分は本当は感情を、あまり感じたくないかもしれないです。私はすごくいろんなことに対してまあ考えたりとか悩んだりとかで。結構、考えてしまうタイプなので、なんかそれを割り切ることができる人っていうのがすごくまあ羨ましいってところがあってで、なんでそれを感じたくないかっていうと、やっぱり自分には悩まないってことはもう無理だっていうふうに思っていて、まあ悩んじゃう性格っていう

ふうには思っちゃってるんで、そこに対して自分にはどうにもできないところ。なので、なんかこう、それをまた突きつけられている感じがして、あんまり今感じたくないのかなっていうふうに思います。

⑥そういった感情をどのようにコントロールしていますか

【 学生 A 】

利用者の感情とかであれば、それは指導者と一緒に振り返るっていう場で、こういう話があって自分は、こう思うんですけどみたいな風に指導者と振り返るのが、コントロールする方法の一つなのかな？ただ、指導者との関係で、悩むこととかっていうのは、なかなか打ち明けづらいので、それは巡回の時の先生であったり、帰校日の学生同士でっていうところでストレスのコントロールを図るっていうのが、あると思います。

利用者さんの話が辛いなって思うときは、コントロールするようには努めてると思います。顔に出さない。聞くこと自体は辛いと私は感じたことはないと思いたいものとしてはないとは思いますが。

個人的な価値観で言えば、例えばこう辛くて泣いてるって言った時に、私もちょっと涙流すって言った方が、利用者さんがきっと、その分かってもらえたとかっていう利用者さんの共感してほしいっていう、もしかしたら根底にある思いとかはきっと叶えられるとは思いますが。

もし、自分が逆の立場でその話を聞いてくれた人が、もし今自分が泣いてる時に一緒に泣いてくれたら、まあそうやって親身に聞いてくれて、自分の気持ちに寄り添ってくれてるんだっていうふうなことを思うので、同じ感情をあらわにするっていうこと自体は、個人的な価値観としてはいいのかなって思う反面、それを実習生がワーカーを目指すものだって言った時に、ここは感情に流されて、ある意味で見えなくなることもあると思うんです。利用者と同じ立ち位置にいることによって。

関係するのは利用者だけじゃないと思うので、環境的に言えば。なのでそこは流されちゃいけないのかなと思って悲しそうな表情はまあ顔に出さないっていうと、ちょっとまたさっきとじゃ違うじゃないかってなってしまうのですが、あんまり顔に出さない。まあ動揺とか不安を煽ると思うので、私自身が動揺したような顔は出さなかったり、不安そうな顔しないとかこうマイナスなものを顔に出さないっていうのがあります。辛いときもあります。

【 学生 B 】

考えつくまでというか、もう考えることを思考ストップすることがもう無理なので、難しいのでもうずっと考えています。

もう考えないようにするっていうこと自体が、そもそもまあストレスになったりとかなので、まあ、もう考え尽きるまで考えたりとか。

あとはあのウォーキング。音楽聞いてウォーキングして、まあ、ちょっと気分転換。まあ、それでも考えちゃう時はあるので、そういう時はもう寝るとかなんか、そういう風にある、意味で考えないようにしようっていうのは無理なので考えまくって、もう疲れたなとか、もうこれ以上考えても無理だって思うまで考える感じです。

⑦福祉分野を諦めようと思ったことはあるか

【 学生 A 】

あります。

一番は実習中だと思います三年生，四年生の実習です。

座学は目に見えて、まあ点数として形は出るので、そこにはある意味で揺らぐものがないと言いますか、結果として現れているので、そこで、もうやめようとかっていうのはあんまり思わないんですけど、実習だと正解がないからこそ福祉だっていうこともありますし、ある意味で私の個人的なことを言えば、座学の出来と、実習の出来がちぐはぐな気がして、ある意味で自信がなくなると言いますか、福祉が向いてないんじゃないかな。ほかの帰校日なんかでみんなと集まった時に、それぞれの学びを共有して、自分も学びはあるけど、すごい隣の芝生は青いじゃないですけど、ほかの施設に行った人がこんな学びを得られてる。自分はなんか何も得られずに、ただ、実習の日を消化してるっていうふうに見えてしまったこともあります。あとは、どうしてもこう実習中に感覚の話になってしまうんですけど、うまく頭が回ってない気がして、それを緊張からなのか、なんか色々違うことを考えてるのか、そこはまだちょっとあれなんですけどうまく頭が回ってない感じがして、それで、例えば面談の同席しましたで、患者さん、利用者さんと関わりましたって、いろんなワーカーの仕事の面談場面とかに関わるって、利用者さんだったり、家族が、感情をあらわにするって言った時になんか自分が、実習生という立場も絡んできてるんですけど、自分が何もその患者さんとかの涙を見て、辛いとは思うんですけど、そこから、なんか辛いとは思うんです。もちろん、突然なったりかするので辛いなって感じる反面、自分と別世界で起こっているような気がして、なんかそこに、何も感じてないわけじゃないんですけど、そこから、どうしようああしようみたいなのが、なんか全然出てこない時に、自分が何も考えを持ってないような人間に見えてで、それがなんかまた言い方はちょっと不適切だと思うんですけど、なんかサイコパスみたいな自分が。そういうふうに見えて、なんか福祉に向いてないんじゃないかなって、自分は福祉、やるべき、携わるべき人間ではないかもしれないっていうふうな、自己嫌悪じゃないんですけど、そういうのにはなんかなったことはあります。

【 学生 B 】

ないです。

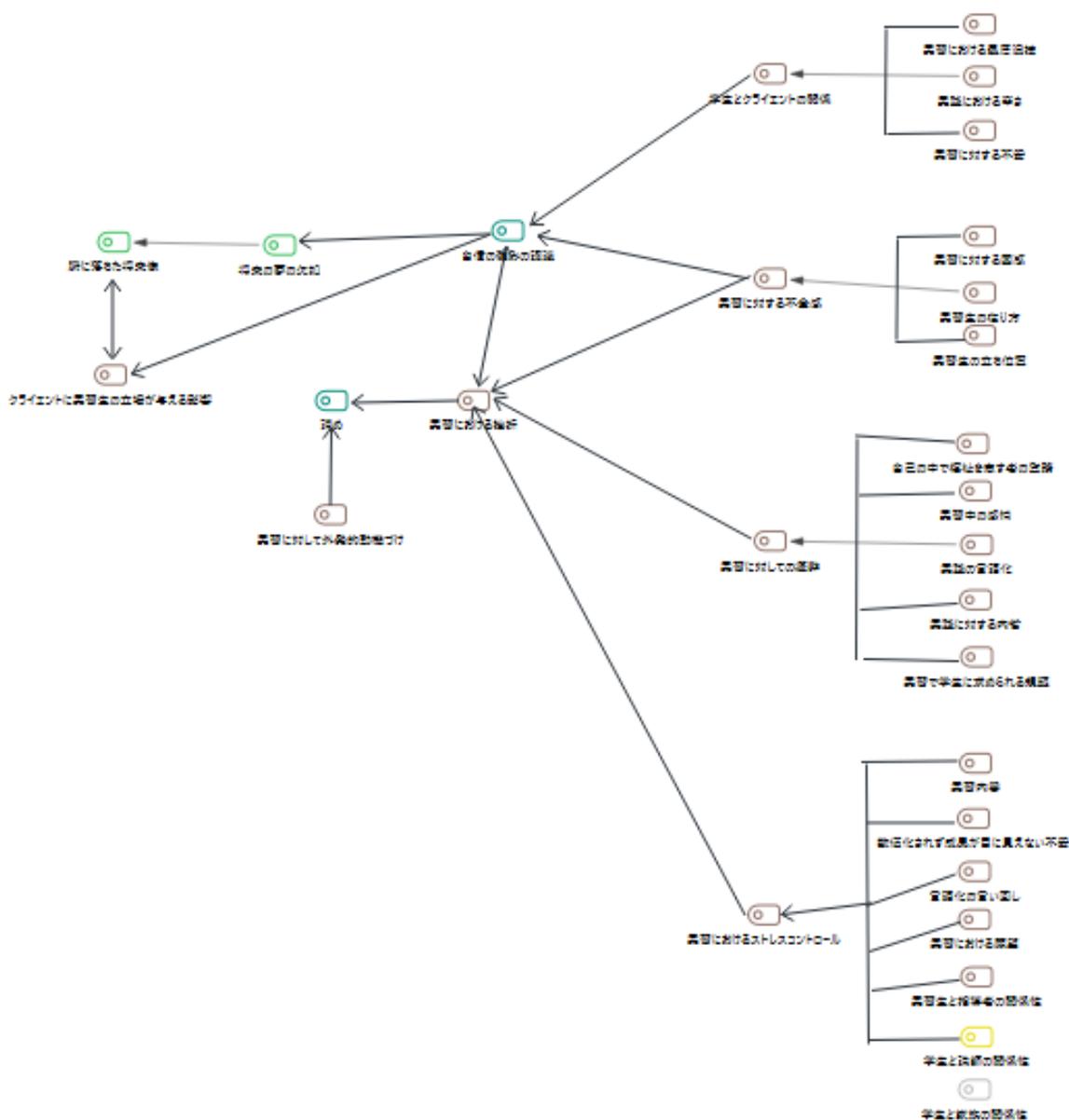
他にやりたいことがない、見つからないというか、まあうん。

特にじゃあ福祉以外で私、何ができるんだろう？と思った時に、まあ特になんかやりたいこともないですし、それだったら、やっぱり強みを見つけられたのは福祉だし、そこで賞賛っていうかしてくれる人もいます。

福祉しかないのかなというか、まあ、いい意味でいい意味で福祉以外考えられないから福祉みたいなのところがあると思います。

上記の代表質問に対する回答にあわせて、個々に合わせた質問を実施した。その結果、学生 A および学生 B の逐語記録に対してコード化を実施し、166 のコードに分類され、分類したコードを更にカテゴリー化し分類を実施した。

【実習におけるクリエイティブコーディング】





理想とする実践と現在の実践に乖離が大きければ大きいほど自信が失われていく。

そして、実習においては、プログラムとして実践の記録が必須とされている。つまり、自身の実践を思い出し、振り返ることにより、自己肯定感の低下が強化されることが十分考えられる。

学生 A, B ともに共通してみられるのが、クライアントと関わることに対しての拒否感や実習教育に対する拒絶、実習指導者との関係不全などの要因が中心ではないということだ。責任感の強さや、高すぎる理想像などといった内的要因から、実習に対して不全感や疲弊を感じ、挫折が危惧される。

しかし、上記の不全感や疲弊を察知し、実習指導者が学生と対話をしたことにより、学生自身が反省から内省へと変容し、自身の強みの認識につながる結果にもなった。クライアントとの関わり方や、クライアントの境遇などといった対人援助に対しての緊張ではなく、結果が目に見えないこと、自分自身がどのように見られているかといった、評価を気にするのが特徴的であり、教員及び実習指導者は留意しなければいけないのではないかと考えられる。

次に、演習授業において、学生 A と学生 B の間で大きな数値の差が生まれた。インタビューをみていくと、学生 A は座学や実習の結果は自己責任になるが、演習で他者と取り組むことにより、責任分散という思いがある一方で、学生 B は演習教育に対して、強い思い入れがあるといった発言もあり、自責が強化されていることが考えられる。

学生 A のように、過度な自責と高い目標は、時に自己肯定感を必要以上に下げ、不安を助長し、消極的な思考と言動、行動へと繋がる可能性がある。そしてこれは、日常行動検査における AC の傾向と類似され、学生 A も AC に分類されている。

そして最後に、模擬試験においてであるが、社会福祉士および精神保健福祉士の国家試験は絶対評価である。合格基準点に達すればすべての者が合格となる。

このことを踏まえて、学生 A においては、試験が終わる安堵感よりも、結果を気にする傾向がある。つまり、結果主義の思考が強いため、学業におけるストレスの根本となっていることが考えられる。そして、学生 A は在学中から上位の成績修めていたため、これを維持することが求められる中で、試験の一回一回に対してプレッシャーや、安定して高い成績を維持できないことへの不安が強くなり、試験の結果だけでなく、自己評価にも影響を与えている。

学生 B も同様に、結果主義の思考ではあるが、学生 A との大きな違いは所属に対する欲求であった。学生 A は点数の増減に対して焦燥感を覚えるのに対して、学生 B は上位グループに所属できるかどうか焦燥感を覚えると発言があった。「上位でいられない＝自分の勉強が甘い」と結論付けていると発言もみられた。

学生 B は、ストレスの対処法として「勉強すること」を挙げているが、結果主義思考でもあるため、その結果が自分の考え通りでなかった場合、ストレスや不安につながるものが危惧されるのではないかと考えられる。

## 【5. 結語】

今回、学生2名を対象に唾液アミラーゼ測定および半構造化面接を逐語記録に起こす作業を実施した結果、測定値が高い＝悪い環境とは必ずしも言えないことが考えられる。そして同時に、効果的な授業を今後構築するにあたって、授業の展開方法だけではなく学生の思考の傾向や現在を生きる学生の特性を出来る限り正確に把握していかなければいけないのではないのか。

日常行動検査や定期的な唾液アミラーゼ測定、そして面談記録を分析することにより、より効果的な方法が具体的に構築できる可能性が考えられる。

今回は、具体的な方法まで言及するに至らなかったが、今後質的研究と量的研究のミックス法を踏まえた上で、継続し教育と専門職養成の発展をさせたいと考える。

## 【引用文献】

1) 水野 雅之、菅原大地、谷秀次郎、吹谷和代、佐藤純、『若手のソーシャルワーカーのバーンアウトと離職意向，セルフ・コンパッションの関連』、東京家政大学研究紀要第61集、P105-110

## 【参考文献】

- 2) 南彩子、『ソーシャルワークにおける共感疲労とレジリエンス』、天理大学社会福祉学研究室紀要第17号2015年、P15-23
- 3) 古市孝義、『介護福祉士の感情労働とストレスに関する一考察人間関係学研究』、社会学社会心理学人間福祉学 大妻女子大学人間関係学部紀要 P155-160
- 4) 下村弘治、金森きよ子、西牧淳一、芝紀代子、『教育現場でのストレスマーカーとしての唾液アミラーゼと唾液コルチゾール測定の有用性について』、生物試料分析 Vol. 33, No 3、P247-254
- 5) 田中康雄、『社会福祉従事者に対する職場のストレス対策としての短時間面接の有用性— 過疎化・人口減が著しい地域の社会福祉法人を対象に一』、日農医誌 72 卷 2 号、P58-68
- 6) 北古賀優紀、安藤優加、大和孝子、『女子大学生におけるストレスと身体組成および食習慣との関連』、中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要第50号2018、P159-167
- 7) 田中生雅、荒武幸代、田中優司、『大学生のメンタルヘルス状況と身近な相談環境に関する調査より』、CAMPUS HEALTH、P142-147
- 8) 大村壮、『福祉労働従事者の感情労働と精神的健康との関連』、科学研究費助成事業研究成果報告書、課題番号 24730499